

川崎市民マーケット取扱商品

堅実販売

第2集

1995

川崎市民マーケット

はじめに

川崎市市民ミュージアムは、市域に関わる考古・歴史・民俗資料をはじめとして、今日の都市文化の形成に大きな役割を果たした複製技術による芸術作品の調査研究および収集・保存を目的に、昭和63年11月に開館した複合文化施設です。

さて市民ミュージアム歴史部門では、すでに準備室の段階から多くの市民の方々のご協力のもと、歴史資料の所在調査や収集をすすめてまいりました。また昭和40年以来博物館活動を担ってきた産業文化会館(現教育文化会館)の所蔵資料も保管替えとなり、現在歴史部門では近世期の地方文書を中心に、数多くの資料を収蔵しております。そこでこのたび、これら所蔵資料を紹介することを目的として、市民ミュージアム収蔵品目録－歴史資料－を順次刊行することとなりました。これにより市民ミュージアム所蔵の歴史資料につき、広くご利用いただければと思います。また歴史部門では、川崎市域史を解明するために不可欠な文書資料を共有の財産として広く公開しようと、『川崎史資料叢書』を刊行しております。こちらも併せて、ご利用いただければと思います。

なお本書は、第二集として近世後期以降川崎の沿岸地域の開発に関する資料を豊富に有した池上家文書と、それに関連する飯田家文書を収録いたしました。

最後になりましたが、資料調査についてご快諾いただき、さらに貴重な古文書をご寄贈くださいました旧所蔵者の皆様にあらためて厚く御礼申し上げます。

平成7年3月

川崎市市民ミュージアム

目 次

はじめに	1
凡 例	4
資料解説	5
池上家文書	11
飯田家文書	86

凡　　例

1. 本書は川崎市市民ミュージアム歴史部門が所蔵する資料の目録集である。歴史部門が所蔵する資料は、市民ミュージアムの建設準備段階から開館以後に収集した資料以外に、昭和40年以降博物館施設として機能していた川崎市立産業文化会館（現：教育文化会館）学芸課が所蔵し保管替えとなった資料も多数含まれている。これら資料を含め所蔵資料の大部分は近世期の地方文書であり、いずれも川崎市域史を解明する上で貴重な資料群である。
そこで本書は第二集として、中原図書館が長年にわたって所蔵し市民ミュージアムに保管替えとなった池上家文書と、これに関連する飯田家文書を収録し、広く紹介するものとする。
2. 池上家文書については従来、神奈川県史編纂の際に刊行された『神奈川県史資料所在目録－川崎市（その1）－』第42集が基本の目録として利用されていたが、今回あらたに再整理・再分類を行いました。若干従来と異なる部分もあるかと思うが、未収録であった資料もあらたに含めている。今後は、当目録をもって基本台帳とさせていただきたいと考えている。
3. 原則として資料の原題を表題としたが、原題の記されていない資料、あるいは原題のみではその内容が判然としない資料などについては、（ ）を付して仮表題もしくはその具体的な内容について記した。
4. 年代が不明の資料については特に記していないが、内容などから推して判断できる場合は、（ ）を付してその年代を記した。
5. 形態は、資料の形状により堅、横、小横、綴、状、葉などに分類した。
6. 表題などが破損・虫損などによって判読不可能な箇所については字数を推定し、□・□または□□で示した。さらに前欠、後欠、あるいは虫損の程度などの注記については< >で示した。

資料解説

1. 池上家文書

池上家は、その『由緒書』によると天慶3年（940）に摂政藤原忠平の三男忠方が平将門の乱を平定するため関東へ下向し、その後武藏国荏原郡千束郷に住して池上と称したことを見はじまりとしている。その後、21代幸広が父幸種の着手した海辺寄洲の新田開発事業を継承し、元和年間に千束郷の屋敷や山林を池上本門寺に寄進して大師河原村を立村し、これから川崎における池上家の歴史がはじまつたのである。

さて現在市民ミュージアムに収蔵されている池上家文書の大半は、24代池上幸豊に関する資料である。幸豊は享保3年（1718）に大師河原村で生まれ、12歳で父幸定が没し名主職を継いでいる。そして曾祖父幸広以来の新田開発に従事するとともに、成島道筑らに学んだ国益思想に基づき砂糖の国産化などに努めた。また一方では、京都の冷泉家の門に入り和歌を学び、自ら「與樂亭」と号して近世和歌の世界に親しく交わっている。彼は寛政10年（1797）に81歳でこの世を去ったが、その多彩な生涯は今残る「池上家文書」から窺い知ることができるだろう。しかしこの古文書群は決して一地方の名士の生涯を伝えるものではなく、川崎という地域史、さらには日本の近世後期における殖産興業を考える上でも貴重な資料である。そこで今回「池上家文書」の目録を作成するにあたっては、幸豊という人物を中心に池上家が着手した事業や特徴ある内容に留意して、以下のように分類をおこなってみた。

A. 池上新田

1. 諸用留
2. 檢地帳・野帳
3. 開発・普請・争論
4. 年 貢

B. 諸国新開場見立

C. 産業

1. 和製砂糖

a. 諸用留・由緒書

b. 全般

2. 製塩

D. 村政一般

E. 池上家

F. 書簡留・書簡

G. 池上文庫

1. 和歌・文学・歴史

2. 冷泉家・門下和歌

3. 茶・華・香道、陶芸

4. 札式

5. 辞書・類書

6. 医療

7. 算法

8. 天文・占卜

9. 兵法

10. 農業・農政、園芸

11. 水防・普請

12. 伝記

13. 地誌・紀行

14. 見聞書留

15. その他

H. 絵図

1. 池上新田(開発・普請・境界外)

2. 新開場見立関係

3. その他

I. その他

では次に、この「池上家文書」を特徴づける代表的な事項について紹介をしていきたいと思う。

[新田開発と諸国新開場見立]

幸豊は延享2年（1745）に大師河原村地先に太郎新田を開発した後、翌3年に同村地先の海辺寄洲70町歩と隣村である大嶋村の菅野と流作場31町歩の合わせて101町歩を10年間で自費開発するという大規模な計画を関東郡代に願い出た。これに対し幕府はよく吟味した上、再三にわたって規模の縮小を求め、最終的には宝暦2年（1752）11月に15町歩の開発を許可している。これにより幸豊は同9年開発を終え、同12年に検地を受け池上新田として立村したのである。

さて「池上家文書」の中で新田開発に関する資料には、まずその開発過程を知る上でまとめたものとして『池上新田諸用留』9冊がある。この資料には延享3年（1746）の開発願書からはじまり、開発に関して幕府や諸村に対して提出した書類が写されている。さらに開発にあたっては堤の破損や多摩川の洪水などによって工事が難航したわけだが、そのあたりの事情もこの資料からよくわかる。まさにこの資料は幸豊の新田開発の開始から成功まで、そしてその間の糾余曲折を物語るものであるといえるだろう。その他にも検地帳をはじめとして、年貢関係資料や開発・普請・争論に関する詳細な古文書が多く含まれている。

また幸豊は宝暦12年に池上新田を立村した後、勘定奉行の命によって多摩川流域や江戸湾の海辺地の新田開発の見立て役に命じられている。この関係の資料も43件ほどあるが、なかには大坂の淀川河口付近の新開場見立など遠方の開発に関する資料も含まれている。

さてこれら池上新田の開発や諸国の新開場見立に関して、目録では別に独立して分類してあるが、多くの関連する絵図がある。これら絵図は、古文書に記された文字の世界を、より具現化するビジュアルな資料として注目されるだろう。いずれも色彩鮮やかな絵図であり、川崎周辺に限らず、常陸や下総、さらには駿河、関西方面などの絵図も含まれている。

[和製砂糖]

池上家と砂糖との最初の関わりは、八代將軍吉宗が砂糖の国産化を推進するなか、幸

豊の父幸定が幕府より甘蔗苗六根を下賜されたのにはじまる。そして幸豊の時代になって、池上家は本格的に砂糖製造に従事するようになったのである。幸豊は当初平賀源内の師である田村元雄に製糖法を学んだが未だ完全ではなく、後に河野三秀から白砂糖の製糖法を学び会得して、これ以後積極的に甘蔗栽培と製糖法の伝授に取り組んでいったのである。特に製糖法の伝授に意欲を燃やし、明和5年（1768）に勘定奉行所の許可を得ると安永3年（1774）をはじめとして、天明6年（1786）、同8年（1788）と三回にわたって砂糖伝授の旅に出ている。この結果、幸豊は20ヶ国余り131ヶ村の農民ら152人に砂糖の製法などを伝授した。

さて和製砂糖関係の資料のなかでは、特に宝暦11年（1761）から寛政2年（1790）に至る約30年間の『和製砂糖一件諸用留』12冊が注目されるだろう。ここには砂糖製造に到る由緒から、製法、伝授と幕府などに提出した願書が記されている。この『諸用留』をもって、幸豊の砂糖に対する考え方や姿勢をよく窺い知ることができるだろう。その他にも伝授されたことを示す手形類や砂糖座設置の願書、さらに伝授の旅に出た際の関係資料などがある。また幸豊晩年には氷砂糖の製造にも成功しており、その経過や規模を記した古文書もある。なお池上家では幸豊一代で砂糖製造を終えたのではなく、その子孫によっても家業として伝えられており、関係古文書は明治期まで存続し約340件を数えることができ、実物資料としても製糖釜が残っている。

砂糖国産化という近世産業史における貴重な資料群として、より一層の研究が待たれると同時に、幸豊という人間の思想や人柄を考える上でも重要な資料といえるだろう。

【製 塩】

川崎沿岸部における製塩業は、『江戸名所図会』によれば寛文9年（1669）に叶栄雲と泉市右衛門が塩浜の地で開いたのが始まりといわれている。またあるいは、同時期に幕臣佐々木久左衛門が大師河原村の土地が製塩に適しているとみて、原町田村の豪農武藤喜左衛門に製塩業を行わせ江戸市中で販売して以来とも伝えられている。いずれにしても、それ以後は大師河原村を中心に、川中島や稻荷新田、池上新田などでも製塩業が行われるようになった。特に池上新田は開発の目論見段階から小前百姓の助成のため塩焼場としても着目されていたため、開村後には製塩業も行われるようになったのである。しかし実際は小前百姓が独立して経営することは困難であり、結局は塩田を持つ地主と小作的な関係を結び、小作料を支払いながら製塩業を営んでいた。

さて「池上家文書」には、製塩関係資料として現在16点ほどが残っている。なかでも明和元年（1764）の『製塩業仲間取極一札』は、村という枠を越えて塩田の仲間が組織されたことを示すもので、興味深い資料である。なお絵図としても塩浜関係のものが残っているので、併せて利用していただきたい。

[冷泉家と池上文庫]

18世紀、近世中期の堂上和歌を代表する歌人に冷泉為村がいる。彼は京都はもちろんのこと、全国規模で門人を指導し、特に江戸歌壇に大きな影響を与え、江戸冷泉門下は歌壇組織として規模・活動ともに充実して中心的役割を担っていた。さて延享3年（1746）3月冷泉為村は将軍家継襲職の賀使の一員に加えられ、江戸に下向した。この際江戸の多くの門人たちが彼に拝謁したが、それ以外にも新たに門弟に加えてもらおうとする人々も多かった。池上幸豊も、その中の一人であった。幸豊は彼の修学の師である成島道筑（信遍）が冷泉家と親交厚かったことから、彼を通じて門弟になれたといわれている。そして以後、幸豊は生涯を通して冷泉門下として和歌を学んだのであるが、この関係は幸豊一代ではなくその子孫も同様であったのである。ちなみに幸豊の号である「與樂亭」は、宝暦12年に冷泉為村が新田開発の功績を讃えて彼の庵につけたのを用いたものである。

さて「池上家文書」の中には、冷泉家との関係を示す多くの資料がある。一つには書簡類として成島氏との手紙のやり取りの中で、その関係を窺い知ることができるだろう。また『京進書札留』3冊などは、幸豊自身が京都の冷泉家に送った手紙を書き写したもので、金銭物品の贈答など純粋な文芸性では成り立たないもっと人間的な師弟関係があったことを物語る資料として、大変興味深いものである。また池上文庫の中にも、『宗匠家御詠歌』や『冷泉家御詠』など関連する資料が多く含まれている。さらに池上文庫には、成島道筑が著述した『三世のなみ』などの和歌集をはじめとして、『源氏物語』や『伊勢物語』などの物語集も多く含まれ、近世文芸研究の上では貴重な資料群といえるだろう。また茶道・華道・礼式・医療・算法・天文・農政などの関係資料も、興味深い。

以上、四つの観点から「池上家文書」について紹介をした。この他にも芒硝（硫酸ナトリウム）の製造など理科学的な資料をはじめとして、ここで紹介しきれなかった内容

豊富な資料がたくさんあり、「池上家文書」に対する興味はつきないのである。

2. 飯田家文書

飯田家文書は、昭和52年に飯田六郎氏によって川崎市に寄贈された資料である。点数こそわずかであるが、貴重な資料が含まれている。特に中道等氏の著述による池上家文書集は、第二次大戦の戦時下という困難な状況の中で刊行されたものであり、その意義は大きいものである。当時の当主であった池上幸健氏の協力のもと和歌を中心とした文芸資料を翻刻した本書は、現在では散逸してしまい原本を見ることのできない資料が掲載されていることから、大変重要な書籍となっている。ただ残念なことは、三・四・六輯を残すのみで、その他が欠本となっていることである。同様に中道氏による『池上幸豊小伝』・『池上新田開発略史』の同書も一定の研究水準に達したものであり、現在でも研究史に残るものといえるだろう。なお中道氏は昭和13年に編纂された『川崎市史』通史編・産業編の筆者でもあり、当時の代表的な郷土史研究家といえる人物である。さてその他には絵図などがあるが、いまでは失われてしまった往時の池上邸（與樂亭）の写真がある『池上家絵葉書』などは貴重な資料である。